

ニュースの商人ロイター

倉田保雄



新潮選書

日本人のほとんどがロイターという名前を毎日のニュースで読み、また聞いて知っているが、そのロイターがニュースを国際商品として世界中に売りこんだ最初のニュース商人であることはほとんど知られていない。ロイター通信社は、大英帝国とともに成長したが、帝国の解体後も生き残り、百二十余年の“年輪”を誇る不動の存在である。私はかつてこの国際通信社で働き、創始者ロイター男爵の不屈の開拓者精神に魅せられて本書を書いた。著者

商人ロイター

倉田保雄

新潮選書



ニュースの商人ロイター

〈新潮選書〉



© Yasuo Kurata, Printed in Japan, 1979

昭和五十四年六月三十日印刷
昭和五十四年七月五日発行

定価七五〇円

著者 倉田保雄くらた たけお

発行者 佐藤亮一さとう へい

印刷 株式会社三秀舎さんしゅうしゃ

製本 株式会社大進堂だいしんどう

〒162 東京都新宿区矢来町七十一

発行所 株式会社新潮社しんちようしゃ

電話 業務部(03)二六六―五一―
編集部(03)二六六―五四―

振替東京四一八〇八番

(乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。)

ニュースの商人ライター・目次

序曲	ワートルロー・スクープ	7
----	-------------	---

・スクープ中のスクープ

・国際通信王の誕生

幕開け	ニュース商人誕生の背景	13
-----	-------------	----

・ユダヤ人街での生活

・大数学者との出会い

・電信史上の奇妙な発見

・馬で走るメッセンジャー

・弾圧のなかの出版ビジネス

先駆者	シャルル・アバス	32
-----	----------	----

・AFPの前身

・アバス通信社の誕生

・ニュースレター・サービス

・電信か空翔ぶサービスか

・パリに新聞は一紙しかない

半年足らずの見習い修業		43
-------------	--	----

・三人の翻訳志望者

・無謀な独立

・ユーリウス一家の蒸発

電信、列車、伝書鳩、そしてランニング		51
--------------------	--	----

・ヴォルフのベルリン進出

・アーヘンでの通信社活動

・ベルリン・パリのリンクアップ

・英仏海峡をつなぐケーブル

ロンドン金融街へ進出		63
------------	--	----

・黄金のロンドン　・当時の英国電信事情　・ロンドン
取引所一番地　・金融街から新聞街へ　・「タイムズ」攻
略の新兵器　・大西洋横断の海底電信プロジェクト

「ニュースは金なり」

83

・新聞街フリート・ストリート　・ふたたび「タイムズ」
攻略へ　・議会演説草稿をスクープせよ　・これが戦時
報道だ　・ロイター氏とはだれなのか

アイルランド沖の速報戦

100

・南北戦争報道戦の苦難　・水際ボート作戦の勝利
・緊迫化するアメリカ情勢　・大統領暗殺事件のスク
ープ

ヴォルフ通信社との闘い

118

・電信アジア・ハイウェイ　・ビスマルクの暗躍　・ロ
イターと国内通信社　・ロイターの転進

東方進出、ボンベイから横浜へ

129

・スケルトン・ニュース　・東進計画のスタート　・電
文が化けて銀行パニック　・ボンベイから日本へ

ロイター・カーンの大構想

145

・オールド・ジュウリー街　・百万長者通り　・ペル

シアの眠れる宝庫 ・ 動かぬ大英帝国政府 ・ ロシアが
仕組んだ陥穽 ・ バグダッド鉄道計画の挫折

世界ニュース市場の分割

162

・ 通信社版『ヤルタ協定』 ・ フランス戦線取材の明暗
・ 包囲下のパリ ・ モンゴルフィエの気球 ・ パリは
生きている ・ 米大陸進出とAPの擡頭

ロイター王国の攻防

179

・ もう一つの大英帝国へ ・ メッセンジャー今昔 ・ 芸
術家が数学者か ・ 「タイムズ」のスクープ劇 ・ 重なる
難問 ・ 王国の明暗

大いなる遺産

194

・ 『富豪』の遺産 ・ サンドイッチ・スクープ ・ 悲劇
の相続人

エピソード

201

・ PAとの共同防衛 ・ 英国新聞界の共有財産 ・ エレ
クトロニクス時代へ

ロイター家系図・ロイター略年譜

216

あとがきにかえて

221

参考文献

236

ニュースの商人ロイター

“The news agency is like the air we breathe. It is nowhere, but it is everywhere. It is shapeless, but it shapes men's thoughts. It has no policy, but policy cannot be made without it. It is journalism at its most self effacing, yet at its most essential. It is the highly complex function that enables the world to be aware of itself.”



通信社とはわれわれが吸っている空気のようなものである。その存在ははっきり見えないが、どこにでも存在している。

それは無形であるが、人間の思想を形成する。通信社には政策はない。だが、政策は通信社なくしては作成できない。

それは最も控え目ではあるが、きわめて重要なジャーナリズムである。

通信社の機能はかなり複雑だが、それによって世界は自己を認識できるのだ。

序曲 ワーテルロー・スクープ

スクープ中のスクープ

エルバ島に流されたナポレオンが、一八一五年三月ふたたび栄光の座を奪還しようとして脱出したとき、たかをくくっていたパリの新聞は、そのニュースを「怪物、流刑地を脱出」という見出しで報じた。そして、かつての皇帝を「コルシカ生れの怪物」だとか「食人鬼」だとか、あるいは「王権篡奪者」であるとか称して、まさに嘲罵のかぎりをつくしていた。

それがわずか数カ月のちに、ナポレオンがいよいよパリに近づくや「皇帝、あす忠誠なるパリ市にご帰還遊ばさる」と、打ってかわった変身ぶりを見せたのである。これは、当時のジャーナリズムがいかに場当りので、権力に弱く、かつ迅速正確な情報を欠いていたかを物語るものだろう。だが、この時代に、早くも正確な報道が世の中にとって、いかに重要な意味をもち、影響をあたえるかということをもつて演じてみせた男がいる。

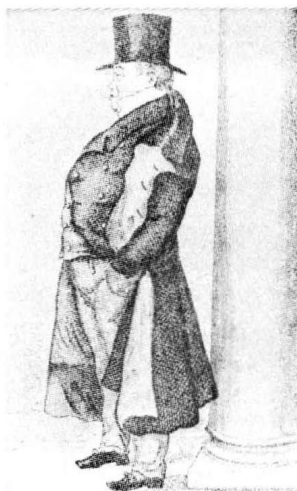
ロンドン金融界の実力者の一人、マーチャント・バンカーのネイサン・ロスチャイルドである。彼はナポレオンの没落を決定づけた、あのワーテルローの戦役（一八一五）に際し、いち早くその敗戦の事実をキャッチして、ロンドン金融界の人びとをアツと言わせる離れ業をやつてのけたのである。

周知のようにワートルローの戦役はいわば、大英帝国とナポレオン帝国の間で戦われた、食うか食われるかの一騎打ちであり、それだけに当時のヨーロッパの金融市場の中枢的存在だったロンドン取引所 Royal Stock Exchange は、一進一退するワートルローの戦況に耳をそばだてていた。耳をそばだてるといっても、電信以前の時代のことであり、頼みは「飛脚便」のみだった。

そのころは、ようやく英国でジョージ・ステイヴンソンが蒸気機関車の試運転に成功したばかりで、まだ鉄道があるわけでもなく、わずかに蒸汽船が一部就航しているに過ぎないという状況だったから、メッテルニッヒが主催したウィーン会議の最新報道や、英国が採用した金本位制をめぐる各国の反響といった、今日というホット・ニュースにしても、人力、馬力に頼らざるを得なかった。

そこでネイサン・ロスチャイルドは、ヨーロッパの戦況を一刻も早くキャッチすべく、専用の飛脚とともに、ドーバー海峡に専用の快速帆船を「走らせて」、速報体制を敷いていた。ロンドン金融界の関心は、ワートルローの勝敗如何で大きな値動きが必至のコンソル公債に集中していた。これは一七五二年以来、英政府が発行していた低金利、無償還の永久公債だが、これをめぐって、すでに「強気の相場師」という定評のあるネイサンが買いに出るか、売りに出るかに異常な注目が集まったことはいうまでもない。

ナポレオンの敗北が決定的になったのが六月十九日、そしてその翌二十日、ネイサン・ロスチャイルドは、ただちにロンドン取引所で売りに出たのだ。本来なら英国が勝てばコンソル公債は当然値上りするのだから、買いに出るのが当然のところ、逆に売りに出たわけだが、もちろん、それにはそれなりの意図があった。



ロスチャイルドの柱

ロスチャイルド家の伝記を書いたフレデリック・モートンによると、その意図とは――
ナポレオンの敗北が決定的になった六月十九日の夜、ロスチャイルド家の海外情報収集役を勤めるロスワースという男が、ウェリントン將軍麾下の英軍の勝利を伝えるオランダの新聞の早版を小脇に抱えて、当時のオランダのオステンド港で船に飛び乗り英国に向った。翌二十日の未明、船がドーバー海峡対岸のフォークストーン港につくと、ネイサンが待ち構えていて、その新聞にさつと目を通すやロンドンに馬車を走らせた。

事実、ネイサンはウェリントン將軍が英政府に送った飛脚便をスピードでも数時間抜いていたので、彼自身がスクープそのものだった。ところが、英政府はなんとネイサンがわざわざ提供した英軍勝利の第一報を信じようとしなかったのだ！

それというのも、英政府はワーテルローに先立って行われたキャトルブラの戦いで英軍が敗退したという報告を受けていたので、そう簡単に戦況が逆転するとは考えられなかったのである。

もちろん取引所でも、このキャトルブラの敗北の情報によってコンソル公債は下落しはじめていた。だから、凡人なら取引所に乗り込んで、スクープをネタにコンソル公債を買いまくるところである。が、ネイサンはここで端倪すべからざる相場師ぶりを発揮して、仕掛け人^{シゲケルヒト}に転じたのだ。当時、取引所内には「ロスチャイルドの柱」という名前がついている一本の柱があった。ネイサンがいつもこの柱に寄りかかりながら売り買いをしていたところから、そう呼び慣わされていたの



ロンドン取引所にある
ロイター像

である。

その日のネイサンは、例によってロスチャイルドの柱に寄りかかり、いかにも英軍の苦戦を見通しているかのように、コンソル公債を売りはじめ、次第に「売り」に拍車をかけて行つた。まもなく、取引所内には、「ネイサンは英軍敗北の確実な情報をつかんだに違いない」という情報が流れ、コンソル公債は文字通り暴落した。ネイサンの仕掛けは効を奏したわけだ。

ネイサンはなおも売り続け、急降下するコンソル公債の動きをじつと見ていて、「墜落寸前」のところ、大量買いに転じたのだ。しかもその上昇タイミングはほぼ「スクープの時効切れ」と一致していた。戦勝の第一報が取引所に伝わったとき、ネイサンはすでにコンソル公債を底値で大量買いしたあとだったから、あとは例のロスチャイルドの柱に寄っかかりながら、公債がぐんぐん値上りし、ぬれ手に粟の快感をたっぷり楽しむだけだったのである。

国際通信王の誕生

著者モートンは「スクープ中のスクープ」という見出しのもとにこのエピソードを伝えているが、その結末については、「この仕掛けられたパニックによつて、どれだけ多くの人の夢と蓄財が失われたことかは想像もつかない。あの柱に寄りかかっていた男がたった一日で、多くの召使を使う身となり、フランスのワットーやオランダのレンブラントの名画を収集し、サラブレッドを子孫の馬小屋に残したのだが、その数もまたつかめないほどだ」と指摘している。

このエピソードはこんにちでも、ジャーナリズムにおけるスクープを論ずる場合にしばしば引用されているが、情報社会の「芽生え」がすでにこの時代に現われていたことを示している。

ところで、ネイサンが「スクープ中のスクープ」をやつてみせた翌年の一八一六年七月二十一日、プロイセン（現在の西ドイツ）はカッセルの町で、サミュエル・レヴィ・ヨサファトという無名のユダヤ教^{ラビ}学者の家庭に、三番目の男子が生まれ、身内の温かい祝福を受けていた。

名前はユダヤ教徒の子供らしくイスラエル・ビアー。

後年、ロンドンに渡り、キリスト教に改宗するとともに、名を改め、ユーリウス・ド・ロイター（男爵）の名で知られることになる国際通信王の誕生である。

もちろん、のちにロンドンで通信事業に乗り出したとき、この有名すぎるくらい有名なネイサンの「スクープ」がロイターの頭のなかにあったことは想像に難くない。いや、そればかりか、彼がロンドンでささやかな通信社を店開きしたとき、本拠を置いたのは、ネイサン・ロスチャイルドの「古戦場」であるロンドン取引所の建物のなかの二つの部屋だった。

そして最初の顧客の一人が、ネイサンの息子のラヨネル・ド・ロスチャイルド男爵であり、以来ロスチャイルド家の存在は、ロイターの成長に欠かせない存在となった。ちなみに、現在、このロイター開業の地にはロイターの大理石像が建っているが、その除幕の紐を引いたのはラヨネル・ド・ロスチャイルドの孫エドムンドであった。

一八九九年二月二十五日、ロイターは功成り名遂げて八十三歳の生涯を終えるが、ロンドンのロイター通信本社から全世界に向けて、「ロイター死去」の第一報が流れ、翌日の「タイムズ」*The Times*をはじめ、ロンドン各紙はいずれも故人の偉業を称えてその死を悼んだ。

「タイムズ」は、『現代における最も聡明な人物の一人だった』とのべ、「デイリー・ニューズ」*Daily News* は、『近代ジャーナリズムの先駆者の一人』であると評価し、「デイリー・テレグラフ」*The Daily Telegraph* は、『この重要な通信社があらゆる誘惑にうち勝って、誠実かつ公平な報道に徹してきたことにはほめる言葉もないほどだ』と絶賛している。

しかし当時、世界の支配民族を自負する大英帝国の知性の一權威である新聞から、一ドイツ系のユダヤ人移民にたいして、こうした最高級の評価がなされたことはきわめて異例だった。おそらく最初にして最後なのではあるまいか。とくに、それがジャーナリズム界の人間にたいしてなされたことは意義深いといわねばなるまい。というのも、英国ではジャーナリストの社会的地位がむかしも今も、アメリカや日本に比べてかなり低いからである。

それから約八十年を経た今日、英国は『大英帝国』からただの英国に変わってしまったが、ロイター通信は逆に、ただの通信社から世界のマスコミに大きな影響をおよぼす国際通信社に成長し、ロイターの名は世界各国で『ニュース』の代名詞になっているといっても言い過ぎではあるまい。

いうまでもなく、ニュース報道のプリンスは『迅速、正確、quick and accurate』であるが、ロイターの百余年にわたる歴史にも、この合言葉が文字通り実践した血みどろな速報サービスと、数々の歴史的なスクープが刻まれている。

• ロイター死去第一報の原文 "Baron de Reuter, the founder of Reuter Agency, died at Nice this morning in his eighty-third year."

幕開け ニュース商人誕生の背景

ユダヤ人街での生活

流行歌や怒鳴り声が四六時中あたりに飢^{こだま}するスラム同然の貧民街。中庭に共同トイレがあるだけで、お湯の出る蛇口もバスルームもないアパート。日傭いの労働者や、浮浪者、犯罪者、貧乏学者が何処からともなくやってきて住みついてしまう溜り場のような一角。引越し荷物が着いたとたんにそっくり盗まれる風紀の悪さ。歩道では行商人がパンの塊、燻製ニシン、ゆで立ての空豆、果物などを並べて売っている……これは、作家アイザック・シンガー（七八年ノーベル文学賞受賞）が書いた二十世紀初頭のワルシャワのユダヤ人街の光景である。

ユダヤ教の牧師^{ラビ}だったシンガーの父親が生きたこの環境と比べて、それより約百年前に同じユダヤ教の牧師^{ラビ}の家庭に生を享けたロイターをめぐるユダヤ人社会の状況がこれに劣りこそすれ、勝っていたとは思われない。

たしかに、ロイターが生れた十九世紀初頭のヨーロッパは、すでにユダヤ人にたいする宗教的な迫害にブレーキがかかり始め、ドイツ、オーストリアでも、社会思潮的にはユダヤ人がその才能に応じて活躍する自由とチャンスを与えられたかにみえていた。

オーストリアで、ユダヤ人の「ゲットー」からの解放が話題になりだしたのは、時代の要請に

よって国王ヨーゼフ二世が一七八〇年に「信仰寛容の布告」を出してからのことである。

この布告は、もちろんプロテスタントにも適用されたわけだが、ユダヤ人にとっては、ゲットーから脱け出してよい、服装の差別を棄ててよい、好きな職業についてよい、自由に商売や工場経営をしてもよい、子弟が公立学校、大学へ入ってもよい——といった幅広い自由を意味しているはずであった。しかし、現実にはそうした自由とチャンスを生かせるユダヤ人はほんの一部の中間階級以上に限られ、大多数のユダヤ人は、ゲットーから出たくとも、貧困のために出られない状態にあったのである。

一方当時のヨーロッパには、解放以前から、僧職、貴族、高級官吏へのいわゆる出世コースに入りこんで、富と名声を築きあげたユダヤ人たちがいた。ゲットーのユダヤ人とはきわめて対照的な豪華な邸宅で、優雅な生活を送る上流富裕階級に属するユダヤ人である。ただし彼らは早くからユダヤ教を棄ててキリスト教に「改宗」していたのである。

キリスト教へ改宗したこれらのユダヤ人は、殊に女帝マリア・テレジア（在位一七四〇—一八〇）の庇護のもとでは、ほとんど望み通りの出世ができ、知識層の中で大きな影響力をもつようになった。十八世紀末から十九世紀にかけて活躍した法学者、経済学者でウィーン市長も勤めたことのあるフォン・ゾネンフェルス（一七三二—一八一七）はゲットー生れだったが、幼いころにキリスト教に改宗、オーストリア軍の兵士を振り出しに学問畑に入り、ウィーン大学で法学、経済学を学び、同大学教授となり、のちに総長に就任し、男爵位を受けて貴族の仲間入りをし、マリア・テレジアおよびその後継者ヨーゼフ二世のよきアドバイザーとなった。

ゾネンフェルスのケースは異例の出世であるとはいえ、改宗組の子弟たちはいずれも高い教育を受け、学術、文化部門で才能を発揮するとともに、自分たちのサロンを作ってそこに集り、